

(承前) 1971年から始まったロマンポルノ路線でしたが、1978年7月時点で日活は資本金50億円を上回る累積赤字を計上し、債務超過に陥ったため上場廃止の危機に直面します。当時の根元悌二社長は、他業種の「流通卸センター(RCC)」と提携し、増資と減資を繰り返し半年間で130億円を調達し、1978年9月には調布撮影所を買い戻し社名を「日活」から「につかつ」に変更します。しかし、根本悌二社長はさらなる投資に失敗します。そして、在籍していた岡田裕を始めとした9名のプロデューサー全員の専属契約を解除します。岡田裕氏は当時のことを、「81年中にまずプロデューサーが、続いて監督たちとベテラン技術スタッフが専属契約を解除されます。さらには20名ほどいた大部屋俳優たちが全員解雇されます。(中略)僕はこの年に実質的に日活の撮影所文化は終わったと思います。この一連のリストラで撮影所の優秀な人材が一斉に日活から放り出されたんです」と回顧しています。

その後の「につかつ」は、ロマンポルノの路線に見切りをつけ1988年7月にそれまでのロマンポルノ上映館を「ロップニカ」に改称、配給会社の「につかつ映画配給会社」を「株式会社シネ・ロップニカ」に社名変更した上で、「ロップニカ」レーベルで一般向け映画の製作・配給を再開しました。そして、1992年創立80周年記念大作『落陽』(伴野朗監督)が記録的不入りとなり、1993年会社更生法の適用を申請し事実上の倒産ということになります。ダイアン・レイン、ユン・ピョウ、ドナルド・サザーランドを起用し、音楽モーリス・ジャール、主題歌をエラ・フィッツジェラルドに歌わせを50億円という破格の製作費をかけた作品を、映画監督の経験もない朝日新聞の記者出身の原作者でもある伴野朗を使ったところに無理があり、(伴野朗に関して言えば、筆者は彼の「霧の密約」という小説を大いに堪能した覚えがあります)、また伴野朗はダミーの監督であって実質的にはプロデューサーの藤浦敦(1930-2023 読売新聞を経て1954年日活入社、助監督から監督に昇進しロマンポルノ作品を20数本監督した後、プロデューサーに転身)が仕切ったという話もあり、まさに混乱の極みの観が避けられません。50億円という製作費に対し配給収入5億円では倒産も当然であり、実に荒っぽい経営状態は企業のサバイバルを不可能にします。

さて、話を1981年に戻しましょう。専属契約を解除された岡田裕は、結城良熙、細越省吾、八巻晶彦、海野義幸、中川好久のプロデューサーたちと制作プロダクション「ニュー・センチュリー・プロデューサーズ」(以後NCPと記載)を結成します。岡田氏は「会社が無定見だから、自分たちで食い扶持を見つけるより仕方がなかった。80年代の映画は、につかつだけでなくテレビ局や出版社も映画に出資する時代だと思って、中原俊、那須博之、金子修介らの監督、山崎善弘、前田米造、水野尾信正らのカメラマンを専属スタッフにしました」と語っています。また、このとき「キャスティング担当」として笹岡幸三郎を招き、日本映画界で初の「キャスティング・ディレクター」の誕生となったことも重要な出来事です。撮影所が機能なくなり、制作プロダクションがキャスティング・スタッフを抱える時代の到来と言えます。そして、NCPは1988年のロマンポルノ路線の終焉までにつかつの製作を支えました。会社側(につかつ)が、個々のプロデューサーに作品を発注するというスタイルでした。この時代の作品を「日活ロマンポルノ入門」を書いた千葉慶は、「81年から82年にかけてロマンポルノのポスターは若者向けを強く意識したポップ化が進み”彩度”が上がり、”暗いイメージ”が払拭された」と指摘します。先に挙げたNCPの六人のプロデューサーたちの活動の概要をまとめたものを別途添付します。1980年代そして1990年代の日本映画界にとって重要な作品が並びます。実に壮観なものです。

1981年にNCPができますが、1979年にATGの社長に岡田裕の早稲田大学の一年後輩の佐々木史郎が就任します。また、1982年には長谷川和彦が九人の映画監督、相米慎二、根岸吉太郎、池田敏春、高橋伴明、井筒和幸、石井聰互(現岳龍)、黒沢清で「ディレクターズ・カンパニー」を創設、さらに荒井晴彦、高田純、佐伯俊道、山田耕大、一色伸幸らの脚本家・企画者が集まり「メリエス」が設立され、時代が大きく動き出す予感が生まれるのですが。(続く)